

---

# 大学生探偵、工藤新一

MUKKU

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大学生探偵、工藤新一

### 【Nコード】

N8717N

### 【作者名】

MUKKU

### 【あらすじ】

帝丹大学で起こった殺人事件に向いた新一はある男と出会う。

その後、新一はその男に依頼を受けて、蘭、哀と共にその男の実家へ行くことになった。

## 第1章 朝（前書き）

新一と蘭は夫婦設定です。  
独立した話ですが、一応、今までの作品の続きです。

## 第1章 朝

米花町2丁目21番地の工藤邸の家主工藤新一が目を覚ますと、隣に世界で最も愛しい女性は居なかったが代わりに朝ご飯を作っているいい香りがしていた。

新一はそんな様子にふっと微笑み、寝室から出た。

寝室のある2階から1階に降りてダイニングに行くと、

「おはよう新一!!」

と3ヶ月前に結婚したばかりの世界一愛しい女性である工藤蘭が笑顔で言った。

新一も優しく、

「おはよう蘭…」

と言った後、まだ朝食の準備中であることに気付き、

「俺も手伝うよ」

と言うと蘭は、

「いいよ昨日遅くまで事件の捜査で疲れてるでしょ？」

と答えた。

蘭の答えに新一は、

「バ一口…それは蘭も同じだろ？」

と返した。

結婚後、蘭は少しでも新一の役に立ちたいと学校がある時など理由がある時以外は新一の探偵業の手伝いをしていて、昨日は蘭も新一の捜査の手伝いをしていたのだ。

「そうだね…じゃあ、この野菜切ってくれる？」

「了解!!」

と2人は一緒に朝食を作っていた。

朝食を食べ終わり2人がそれぞれの大学に行く準備ができると新一は蘭を乗せて車を発進させた。

新一は高校卒業後車の免許を取得していて、依頼で遠出するときレンタカーを利用していたが、蘭との結婚祝いに新一の両親が車を送ってきたのであった。

新一の両親の突拍子もない行動に多少は慣れている新一と蘭だったが何の前触れもなく結婚式の3日後に結婚祝いと言って車が送られて来た時には流石にド肝を抜かれたのだった。

また、蘭の通う帝丹大学は工藤邸から歩いて行ける距離だが工藤邸から新一の通う東都大学までの通り道だという事で新一が車で送っているのである。

帝丹大学に着いて蘭が、

「ありがとう!!」

と言って車から降りようとすると新一が蘭の頬にキスをした。

「し…:新一!？」

と蘭が焦ったように言うと新一は、

「誰も見てねーからいいだろ!」

と笑顔で言った。

そのセリフに蘭は赤くなって車を降りると新一が蘭に、

「蘭!!行ってらっしゃい!!」

と言い、蘭も輝くような笑顔で、

「行って来ます!!」

と答えた。

そしてその後新一は東都大学へ車を発進させた。

これは工藤新一、蘭夫婦のいつもの朝の風景である。

## 第2章 事件の呼び出し

午前の講義が終わり新一が蘭の作った弁当を食べようと開くと、

「おっ愛妻弁当か？」

「うらやましいかぎりやな〜」

と新一にそっくりな声と大阪弁丸出しの声が出た。

新一は声をかけてきた快斗と平次にジト目で、

「バー口…それはオメーらも一緒だろ？」

と返すと平次と快斗は、

「そらそうやけど…」

「あんまりにも新一が蘭ちゃんの作った弁当を嬉しそうに見てるからよー」

と答えながら自分達も新一と同じくとても嬉しそうに弁当を開いていた。

快斗は快斗の誕生日に幼なじみで恋人の青子と、平次は夏休みに入っただけにこれまた幼なじみで恋人の和葉とそれぞれ結婚して新一と蘭同様にラブラブ夫婦である。

新一は自分の弁当を嬉しそうに食べている2人を見て、

（オメーらもよっぽど嬉しそうにしてるじゃねーか…）

と内心毒づいていた。

3人がそれぞれ愛妻弁当を食べ終わった頃、新一の携帯が鳴った。

新一は、

「はい…工藤です…」

と顔を引き締めて電話に出る平次も顔を引き締めた。

「はい…えっ？…警部まさか…」

と新一が少し焦ったように言って快斗と平次は緊張したような顔をしたが、新一は、

「…そうですね…」

とホツとしたような表情になった。

「…判りました…では…」

と言って新一は携帯を切つて、

「行くぞ服部！！帝丹大学で殺人事件だ！！」

と平次に言つた。

「帝丹大学やて！？」

「じゃあまさか青子たちが？」

と平次と快斗が焦つたように言つたと新一は、

「いや、蘭も和葉ちゃんも青子ちゃんも巻き込まれてないようだぜ

…」

と答えた。

そのセリフに平次と快斗はホツとした表情になり、快斗は、

「新一の表情の変化はコレが理由だったのか…」

と納得したように呟いた。

「とにかく、もうすぐ高木刑事が迎えに来る…行くぞ服部！！」

「よっしゃ！！」

と新一と平次が行こうとすると快斗が、

「俺も行く！」

と2人に付いて行つた。

高木刑事が東都大学に到着して新一と平次を車に乗せるといつもは乗って来ない快斗まで車に乗って来て、

「えっ黒羽君も！？」

と驚いたように言つた。

すると快斗は、

「俺はIQ400だし連れてかない手は無いですよね？」  
と言つた。

高木刑事はたまに新一や平次と一緒に事件に巻き込まれて2人同様に捜査に協力してくれることのある快斗が2人に匹敵するほどの推理力があることを知っているためすぐに了解して、3人を乗せて帝丹大学へ車を向かわせた。

### 第3章 帝丹大学へ

帝丹大学へ向かう途中の車内、新一が、

「それで、事件の内容は？」

と聞くと高木刑事は、

「ああ…帝丹大学の理学部の三年生の男子生徒が刺殺されてたんだ…第一発見者は同じ理学部の男子生徒2人で被害者の友人だよ…殺害現場は理学部の第2研究室の裏で死亡推定時刻は今から2時間前なんだけど、そこは普段人がめつたに出来ない所で目撃者も無し…凶器のナイフは発見されたけど指紋は検出されなかつたし、被害者は恨みを買いやすい性格だったらしく死亡推定時刻にアリバイの無く被害者を殺害する動機のある容疑者が7人も居るんだ…」

「そうですか…」

と新一が答えて平次と一緒に考え事をしてる間に一行を乗せた車は帝丹大学に到着した。

新一達が車を降りて現場に向かおうと校内に入った直後、

「ねえ、あれって学生探偵の工藤新一じゃない？」

という女性の声がして、その後、

「ホントだ〜！！学生探偵の工藤君だ〜！！」

「キヤー！！私、凄いファンなの〜！！」

「かつこいい〜！！」

と、新一はたくさん女子生徒に取り囲まれてしまった。

「あつ…ちよつ…事件現場に行かなきゃいけないんだけど…」

と新一は困ったように言ったが大勢のファンまたは野次馬は全く聞く様子がなくさらに人ごみが増えていった。

人ごみの外でポツーンと立っていた平次が、

「俺も学生探偵やのに…なんやこの扱いの差？」

と不機嫌に呟くと、

「東京での知名度の差だろ？」

と快斗が平次の肩にポンと手を置きながら言った。

高木刑事が人ごみに巻き込まれている新一を見て、

「困ったな…早く現場に行かなきゃいけないのに…」

と困ったように言うと、

「ほんなら工藤は置いて先現場に行つてまお！」

と平次が言った。

「けどそうすると工藤君が現場に来れなくなるんじゃない？」

と高木刑事が言うと、今度は快斗が、

「アイツも現場が理学部の第2研究室だって知っているんだし…あの女の子達に第2研究室まで案内してもらうなりどうにかして現場にたどり着けますよ…」

と言い、高木刑事も2人の言葉で、

「じゃ…じゃあ、行こっか2人共…」

と遠慮げみに言いながら事件現場に向かい出した。

そんな平次、快斗、高木刑事の動きに気付かず大勢の女の子に囲まれて立ち往生している新一は、

（ったく…これじゃ動けねーじゃねーか…）

と困っていた。

## 第4章 人ごみ

平次達が新一を置いて行って10分後、新一を取り囲んでいた人ごみはさらに大きくなっていた。

「ん？何だろあれ？」

とちょうどそこに通りがかった鈴木園子がその人ごみを指差しながら言つと、一緒にいた服部（旧姓：遠山）和葉が、

「せやねえ…さっきパトカーのサイレン聞こえとったけどそれとはちやうやろっし…」

と言い、さらに黒羽（旧姓：中森）青子が、

「そうだよね…事件の野次馬だったら警察の人がいるはずだし、『KEEP OUT』っていうテープで入れないようにしてるし…」  
と悩んだように言つた。

それを聞いた工藤（旧姓：毛利）蘭は、  
「事件つていうより芸能人の周りにファンがいっぱい集まってるって感じじゃない？」  
と言つた。

「そう言われるとそやな」

「さっすが蘭ちゃん！！」

と和葉と青子が感心したように言っていると、

「私ちよつと見てくる！」

と園子が言い、

「あつ！園子！！」

と蘭が言つたのにも関わらず、園子は人ごみの中へ入って行つた。

園子が人ごみの中をかき分けながら中心に行つてみるとそこには見覚えのある男がいた。

園子はその人物を見て、

「し、新一君！？…何で帝丹大学に？」

と驚いたように言つと新一も、

「園子じゃねーか！」

と驚いたように言っていた。

園子は、新一が園子のことを呼び捨てで呼んだため、周りの新一ファンに、

「何この女？」

というような目で睨まれ一瞬身じろいだが気を取り直して、

「ちよつと 안타こんな所で何やってんのよ！？」

と新一に食つてかかった。

すると新一は、

「事件で呼ばれてこの帝丹大学に来たら女の子達に囲まれちまつてよ…」

とウンザリした表情で言つた。

園子が呆れたように、

「まったく…蘭も苦労するわね…」

とぼやいていると新一は、

「んなことより助けてくれねーか？事件現場に行かなきゃいけねーのにこの状態じゃ身動きがとれなくてよ…」

と園子に頼んだ。

新一のセリフに園子は大きなため息をついて、

「しょうがないわね…」

と言つて新一の手を引っ張り始めた。

園子が人ごみの中に入って5分後、人ごみの外で園子を待っている蘭達は、

「遅いね…園子…」

「何かあつたんやるか？」

と心配そうに園子を待っていた。  
すると、

「プハー……」

と疲れた表情の園子が人ごみの中から顔を出した。

「あっ！園子ちゃん！！」

と園子に気づいた青子が言った後蘭が、

「園子！！どうだった？」

と聞くと園子は怒った表情になり、

「どうもごつもないわよ！！この騒ぎの犯人は……コイツよ！！」

と言って人ごみの渦中の人物であった工藤新一を人ごみの中から引っこ抜いた。

## 第5章 事件現場へ

園子が人ごみの中から新一を引つ張り出すと、

「し、新一！…！な、何でいるの？」

と蘭が驚いたように言った。

蘭の質問に新一が、

「殺人事件で目暮警部に呼ばれてここまで来たら人ごみに囲まれちまっつてよ…」

と答えると和葉は、

「さっきのパトカーはその事件のせいやったんか…」

と納得して、青子は、

「さすが新一君…人気者だね」

と感心していた。

新一が辺りを見渡して、

「さすがに服部達は先に行っちまったか…」

とため息をつきながら言うと和葉が、

「えっ！？平次も来てるん？」

と聞いた。

新一が、

「ああ、服部だけじゃなく黒羽も…」

と答えると青子が、

「えっ！？快斗も？…でも珍しいね、快斗が自分から事件について来るなんて…」

と言った。

その後新一は園子に、

「ところで新一君、事件の現場に行かなくていいの？」

と聞かれて、

「そうだった！！蘭、理学部の第2研究室に案内してくれねーか？そこが現場なんだ！」

と焦ったように言った。

すると蘭は新一に優しい表情で、

「はいはい…わかりましたよ名探偵さん？ついて来て！」

と言って新一を理学部の第2研究室へ案内するために歩き出し、新一がそれについて行くと、

「アタシも…！」

「青子も行く…！」

と和葉と青子がそれぞれの愛する人に会うために新一と蘭を追いかけ、その後、園子が、

「ちよつと！私だけ置いてかないでよ…！」

と言って4人について行った。

4人が現場である理学部第2研究室へ向かっている途中、

「でもびっくりしたよ…！人ごみがあつて芸能人がいるのかと思つたらその中心が新一なんだもん！」

と蘭が驚いたように言うと新一は、

「ひでー目にあつたぜ…！」

とげっそりした表情で言った。

そんな2人の様子を見てた園子が、

「ちよつと蘭！新一君のこと怒んなくていいの！？この男、たくさんの女の子に囲まれてヘラヘラしてたのよ…！」

と怒ったように言うと、

「別にヘラヘラなんかしてね…だろ…！」

と新一は反論し蘭は、

「仕方ないよ…新一有名人だし…」  
と言った。

「けどね…」

と蘭のセリフに園子が反論しようとするのと蘭は、

「まあ…全く嫉妬してないって言ったら嘘だけど…私、新一のこと信じてるから…」

と言った。

そのセリフに新一が赤くなっていると、

「まったく…新一君、本当蘭はアンタなんかにもったいなさすぎるわ…」

「愛されてんなく、工藤君！」

「新一君、蘭ちゃんにこんなに想われてるんだからあんまり心配させちゃダメだよ!!」

と園子、和葉、青子がからかい混じりに言っていると新一が、

「さっきの人ごみに巻き込まれたのも結果的に良かったかな？蘭の本音が聞けたし…」

と言って、その後新一と蘭の間にラブラブな空気が漂い始めさつきまでからかっていた3人はからかうのがバカらしくなってしまっていた。

## 第6章 事件現場（前書き）

前回と題名が似てますね…

## 第6章 事件現場

新一達が事件現場に着くと平次がそれに真つ先に気づき、

「おー工藤！！思ったより早かったやないか！！…けど残念やな」

…工藤が来るまでに事件解決したる思ってたのに…来るの早すぎやろ  
！！！」

と言っていた。

「なんやそれ…」

と和葉が呆れて言うと、

「和葉やないか！！」

と平次はやつと和葉に気づいたかのように言った。

「ところで快斗は？」

と青子がキョロキョロしながら言い、

「そついえば見当たらないわね…」

と現場にいた佐藤刑事もキョロキョロしながら答えていると、

「ああ黒羽やつたら10分くらい前にどっか行ったで」

と平次が答えて、

「服部君見てたのかね？」

と目暮警部が驚いたように言った。

「見てたんやつたらなんで止めへんかったん？」

と和葉が平次に怒ると平次は、

「黒羽がここに来る言うてた時点で途中で抜け出すつもりやてわかつたからあえて止めなかったんや」

と答えた。

「な…なんで黒羽君が途中で抜け出すつもりだとわかってたんだい？」

と高木刑事が驚いて聞くと新一が、

「普段黒羽は自分から進んで事件について来ることはないのに現場が帝丹大学だと聞いた途端について行くなんて言ったらすぐ解りま

すよ…」

と答えた。

そのセリフに蘭と和葉と園子と佐藤刑事は新一が何が言いたいのか解ったような顔をした。

「まさか…黒羽君…」

と蘭が青子を見ながら言うと新一が、

「ああ…青子ちゃんに会うためについて来たんだろうよ…」  
と答えた。

新一のセリフに青子が、

「ええ〜!？」

と赤面しながら驚きの声をあげた。

すると平次が、

「それに黒羽は高木刑事の車に乗る時『自分はIQ400やから連れてかない手はない』とは言うてたけど捜査を手伝うとは一言も言うてへんしな…」

と補足説明した。

「にしても青子ちゃん探しに行かないでここで待ってればよかったのに…」

と園子が呆れたように言った。

すると目暮警部が、

「オホン」

と咳払いをして、

「そろそろ捜査を再開したいのだが…」  
と言った。

そのセリフで平次、高木刑事、佐藤刑事は慌てて捜査を再開し、  
新一も捜査を開始した。

新一が捜査を開始して十数分後、

「あ、蘭ちゃん！この野次馬と警察、事件でもあったの？」  
と男の声がして、

「あっ！山内君！」  
と蘭が答えた。

すると、工藤新一の動きがピタツと止まり次の瞬間物凄く険悪な禍々しいオーラを放ち始め新一の周りの空気が凍りついた。

## 第7章 不機嫌な新一

その後、新一は冷静に捜査を続けていたが、険悪のオーラは一向に収まらず、一緒に捜査している面々の中ではそんな様子の新一にも動じない平次と新一の険悪な雰囲気などお構いなしの佐藤刑事以外は新一に話しかけられないでいた。

そんな捜査の最中、事件の野次馬達の中で事件の様子を見ていた青子の後ろから、

「新一のヤツやけに不機嫌だな…」

という声がした。

「あっ快斗！戻って来たんだ！」

と青子が言うと、

「まさか、青子が野次馬の中にいるとはな…：だったら探しに行かないで待つてりゃよかつたぜ…」

と快斗はぼやいた後、

「ところで新一どうかしたのか？」

と聞いた。

すると園子が、

「あれよ、あれ…！」

と呆れ顔しながらある方向を指差した。

快斗がその方向を見ると蘭が見知らぬ男と談笑していた。

「蘭ちゃんが浮気…：なわけないよな…：蘭ちゃんに限ってしかも新一の目の前で…」

と快斗が言うと、

「当たり前でしょ…！蘭ちゃんが浮気なんかするわけないもん…！」  
と青子が怒ったように言い、

「彼は山内君ゆうアタシらの友達や！」

と和葉が説明した。

「でも山内君いつも蘭ちゃんに話しかけてるよね」

と青子が言つと和葉も、

「せやなあ、けど蘭ちゃんには工藤君があるし、蘭ちゃんにはその気は無くてあくまで友達なんやからええんとちゃう？」  
と同意した。

青子と和葉の会話に、

「蘭ちゃんや青子達にとつちやただの友達かもしれないけど新一には完全に誤解招くんじゃねーか？」

と快斗が聞くと青子と和葉は、

「大丈夫だよ！！新一君も蘭ちゃんもお互いの事をすつごく信頼しあつてるんだもん！！」

「せやせや！！こんなことで蘭ちゃんの事疑う工藤君やないって！！」

とあつけらかと答えた。

（確かに、新一は蘭ちゃんのこと微塵も疑つちやいないだろうけど、蘭ちゃんに近づく男の方がどうなるかわかんねーだろ！！）  
と快斗が心の中で突っ込んでいると園子が、

「蘭のいい所は男女隔て無く誰とでも仲良くなれることだけど…それを自分に好意があると勘違いする男が結構いるのよね…」

と呆れたように呟いていた。

快斗達がそんな会話をしていたなんて知らない新一は捜査を進めながらも険悪な禍々しいオーラを発し続けていた。

## 第8章 ちよつとした修羅場

事件の犯人は新一と平次の名推理で捕まった。

しかしその推理ショー中、新一は犯人に対して容赦というものが一切なかった。

そんな新一の様子に平次は、

(完全な八つ当たりや…)

と犯人に少しだけ同情してたのであった。

事件が解決して、新一が真つ先に蘭の所に行くと、

「お疲れ様、新一」

と蘭がとても愛おしそうな表情で言った。

蘭のセリフで険悪なオーラが吹き飛び優しい表情になった新一だったが、

「えっ!? 蘭ちゃんって工藤新一と知り合いだったの!？」

とさつき蘭と話していた男の声が出てまた険悪なオーラを放ち始めた。

「誰？」

と新一が不機嫌丸出しで蘭に聞くと蘭は、

「友達の山内一輝君だよ！」

と答えた。

「そつ、蘭にとってはあくまでただの友達…」

と少し離れた所で園子が呟くと、

「なんでアイツに忠告せんかったんや? 蘭ちゃんに言い寄ったやなんて工藤の逆鱗に触れる事やてすぐにわかるやろ?」

「蘭ちゃん関係で新一の逆鱗に触れた男がどんな目に遭うか…」

と平次と快斗が聞くと、まず青子が、

「えっ山内君って蘭ちゃんのこと好きだったの!?! 青子ぜんぜん気

付かなかつた…」

と驚いたように言い、和葉は、

「アタシはもしかしたら山内君蘭ちゃんに気いあるんちゃうか思て一度さり気なく蘭ちゃんに旦那さんが居てること臭わしたんやけど山内君に動じる気配あらへんかつたからアタシの気のせいや思てたわ…けどもしかしたら山内君、旦那さんが居てること臭わしたことにすら気付いてへんかつたかも…」

と戸惑い気味に言った。

2人の答えに平次と快斗が呆れたような表情でいると園子があっけらかんと、

「私は気付いてたけど蘭は新一君一筋で山内君には悪いけど山内君に気持ちが行くわけ無いってわかってたし、面白いからこのままでもいいやつて黙ってたのよ!!」

と答えた。

「おもしろいて…」

「園子ちゃん…」

と平次と快斗が呆れている中、新一達の方では山内が、

「あれ？そう言えば、蘭ちゃんの名字も工藤だったよね？まさか兄妹…なわけないよな…」

と言つと新一は不機嫌そうに、

「当たり前だ…」

と言つた。

すると山内は、

「だよな…前に工藤新一は世界的推理小説家の工藤優作と元大女優の藤峰有希子の一人息子だって何かの雑誌で読んだし…そうか!!…親戚か!!」

と勝手に納得したように言った。

そのセリフにムツとした表情になった新一は蘭を抱き寄せて、

「えっ？あっ！ちよっ、し、新一!!」

と急に抱き寄せられて蘭が顔を赤らめながら慌ててるにもかかわら

ず、  
「蘭は俺の妻だ!!」  
と言った。

## 第9章 夫婦

新一の急な結婚宣言に野次馬の中にいた工藤新一のファン達の中から小さな悲鳴が響いた。

そんな中、

「ちよつ、ちよつと新一!!」

と蘭が真っ赤な顔で抗議した。

「別にいいじゃねーか!! 隠すような事でもねーしょ!!」

「そうだけど…こんな大勢の前で…恥ずかしいじゃない!!」

と新一と蘭が言い合っているとあまりに驚いて硬直していた山内が我に返って、

「つ、妻…!!? 蘭ちゃんが工藤新一の!?!」

と叫び声をあげた。

「ああ…蘭は正真正銘俺の妻だぜ!!」

と新一が答えると山内は、

「で、でも工藤新一が結婚したなんてニュース聞いた事ないぞ!!」

と言い、周りの野次馬達も同意するように頷いていた。

そんな様子に新一は、

「別にいいだろプライベートな事なんだからわざわざマスコミに知らせなくても…別に隠してる訳じゃねーから知られても否定はしないけど自分から世間に公表する気はねーよ!!」

と答えた。

「マスコミが聞いたら叩かれそうなセリフやな…」

「確かに…」

と平次と快斗が言っていると、

「アンタ達も同じ理由で公表してないじゃない!!」

と園子につっこまれていた。

「け、けど蘭ちゃん結婚してるなんて一言も…」

と山内がなおも食い下がると蘭は、

「左手の薬指に指輪してるからみんな私が結婚してるってわかってると思つてたけど…」

と恐縮したように答えた。

「それは虫除けかと…虫除けに左手薬指に指輪してる人いるし…蘭ちゃん達に初めて会つた時には蘭ちゃんも蘭ちゃんといつとも一緒にいる3人も左手薬指に指輪してたから…」

と山内が言うと新一は、

「確かに虫除けに左手薬指に指輪してる人いるよな…」

と佐藤刑事の方をチラリと見ながら答えた。

佐藤刑事は以前、左手薬指に指輪をしてると悪い虫が寄つて来ないと親友の宮本由美婦警に聞いて左手薬指に魔除けの指輪を付けて彼氏である高木刑事をかなりヒヤヒヤさせたのである。

(この人の場合、左手薬指の意味も知らず、虫除けも単純に蛾とかの虫だと思つてたんだよな…)

と新一は内心苦笑していた。

「なあ和葉、あの山内っちゅう奴と初めて会つたのって夏休み明けか？」

と平次が新一達の会話を聞いて和葉に聞くと和葉が、

「せやけど…」

と答え、青子が、

「なんでわかつたの？」

と不思議そうに聞いた。

すると快斗が、

「山内つて奴が蘭ちゃんや青子達と初めて会つた時はいつも一緒にいる青子と蘭ちゃんと和葉ちゃんと園子ちゃんの全員が左手薬指に指輪してるて聞けばすぐ解るよ…」

と答えた。

蘭、青子、和葉、園子の中で園子はまだ結婚してないが、夏休み中に修行の旅から一時帰国していた彼氏の京極真と婚約したのであった。

そのため、山内が蘭達に初めて会った時にはみんな左手薬指に指輪をしていて、山内はまだ19歳で4人が4人とも結婚もしくは婚約しているわけがないと思ひ蘭の結婚指輪を虫除けと勘違いしていたのであった。

新一達の話が一区切りついた頃、佐藤刑事が、

「ねえ工藤君達、事件も解決したし、家まで送るわよ？蘭ちゃん達もこんな時間じゃ講義ないでしょうしね！」

と工藤夫妻、服部夫妻、黒羽夫妻と園子に声をかけた。

「もう6時じゃない!!!」

「じゃあお願いします!!!」

と蘭と新一が答え、7人は佐藤刑事と高木刑事の車に分乗してそれぞれ家へ帰った。

## 第10章 依頼

3日後の土曜日、新一が事件のファイルをまとめていると、  
ピンポン

とチャイムが鳴った。

「ハ〜イ!!!」

と蘭が来客の出迎えに出た。

少しして、

「新一!!!依頼よ!!!」

と蘭が依頼人を連れて来た。

新一はその依頼人を見て、

「や、山内!?!」

と驚きの声をあげた。

そう、依頼人として新一の家に来たのは、3日前に蘭に気がある  
様子で新一の怒りを買った山内一輝だったのだ。

「そんなに驚くことないじゃない!!!」

と蘭に注意された新一は表面上は落ち着いた様子でいたが内心はか  
なり不機嫌になっていた。

新一は山内を客間に案内して、

「で、依頼というのは?」

と聞いた。

すると山内は、

「実は、家で不振な動きをしている人間がいるらしくそれについて  
調べて欲しくて…」

と言った。

ちょうどその時蘭が紅茶を淹れて持って来た。

山内はその紅茶を一口飲んで、

「おいしい!!!蘭ちゃん紅茶淹れるのうまいね!!!俺もこんなおい  
しい紅茶毎日飲みたいな!!!」

と言った。

山内は蘭が新一と結婚していると聞いてもなお蘭の事をあきらめていないらしい。

そんな様子に新一は咳払いして、

「で、不振な動きとは？」

と聞いた。

その質問に山内は、

「夜中に走り回るような足音が聞こえたりボタンと音が聞こえたらしいんだ…」

と答えた。

「らしい？」

と新一が山内自身が聞いた訳ではなさそうな事に気付いて聞くと山内は、

「ああ、音を聞いたのは親父だよ…」

と答えた。

「泥棒とかじゃないの？」

と蘭が聞くと、

「いや、家のセキュリティは万全だからそれは無いと…」

と答えた。

「となると内部の人間か…」

と新一が呟くと山内が、

「ああ、だから誰が何の目的でそんな事やってるのか調べて欲しいんだよ…ちょうど名探偵の工藤新一と知り合った所だし!!」

と言った。

（知り合っただって言ったってお互いいいイメージなんか持てなかったかと思うが…）

と新一が心の中で呟いた時、

ピンポン

と再びチャイムが鳴った。

## 第11章 2人目の来客

2度目のチャイムに蘭が出て行った後も新一と山内の会話は続いていった。

「その怪しい行動をしてる人物は今夜も同じ事をするかもしれないな……」

と新一が考えながら言うと、

「じゃあ、引き受けてくれるのか!？」

と山内は嬉しそうに言った。

「ああ、怪しい行動をしている犯人が動き出すのが夜中だとしたら今日はお前の家に泊まることになるだろうがいいか？」

と新一が聞くと山内は、

「ああ!！」

と答えた。

その時、応接室の扉が開き蘭に連れられて哀が入って来た。

「よう!どうしたんだ？」

と新一が聞くと哀は、

「工藤君に借りた本を返しに来ただけど…蘭さんにちょうど紅茶を淹れたところだから飲んでかないって誘われて、お邪魔だったかしら?」

と答えた。

「誰？」

と山内が見知らぬ小学生の登場に驚いていると、

「隣の家に住んでる灰原哀ちゃん!よく事件の捜査にも協力してくれるんだよ!」

と蘭が説明した。

蘭の説明を聞いた山内は哀に、

「何年生？」

と目線を合わせて聞いた。

「3年…」

と哀が不機嫌そうな様子で答えたのを見て、

（あんなあからさまに子供扱いされりゃム力つくよな…中身俺より年上だし…）

と新一は内心苦笑していた。

その時山内は哀が返しに来たという本を見て、

「もしかしてこれ？哀ちゃんが返しに来た本って…」

と驚いたように言った。

それもそのはず、哀が返しに来た本は分厚い医学書だったのだ。

「ええ…」

とサラリと答える哀に山内が驚きを隠せないでいると新一は、

「こいつは返しに来ただけだよ！」

と不振に思われないように慌て言った。

その後新一は思い出したように、

「蘭！今日は山内の家に泊まるからお前も準備しとけよ！」

と蘭に言った。

「うん！」

と蘭が答えると、

「えっ蘭ちゃんも来るの!？」

と山内は驚いたように言った。

「うん、新一の捜査の手伝いしてるから…」

と蘭が答えると、

「部屋は俺と同じで大丈夫だから。夫婦だし…」

と新一が言った。

すると山内は慌てたように、

「そうだ!!哀ちゃんも一緒に来てくれないかな？」

と聞いた。

「なんで？」

と哀が不機嫌そうに聞くと、

「家の親父、かなりの刑事嫌いで探偵嫌いなんだよ…だから工藤が

探偵だとバレたらヤバいんだ…でも子連れなら怪しまれないだろ？」  
と言った。

山内の父親が探偵嫌いなのは本当で山内は新一に探偵だとバレないように頼むつもりだったが、哀と一緒に来てくれと頼んだのは、新一と蘭が同じ部屋で寝る時2人きりになるのを防ぐためである。

「けど、子連れって言ったって俺と蘭に小学生の子供がいるのは無理があるぞ…」

と新一が言うと、

「親子じゃなくて兄妹でいいじゃない!!」

と蘭が言った。

蘭のセリフに納得した新一は、

「博士には俺から連絡しとくけど頼めるか？」

と聞いた。

すると哀は、

「フサエブランドの最新バッグで手を打ってあげてもいいわよ？」

と新一に言った。

「俺かよ…一緒に来てくれって頼んだのは山内なんだけど…」

と新一が言うと哀は、

「だつたら彼に捜査費用として請求すればいいじゃない…」

と答えた。

「おい…」

と新一がつっこんでいると、

「ありがとう哀ちゃん!!」

と蘭が嬉しそうに言って、哀と一緒に行くことが決まった。

## 第12章 車内にて

一行は山内の家まで新一の運転で向かっていた。

ちなみに新一は変装のためにコナンの時に使っていた犯人追跡メガネをかけている。

運転している新一以外の座席は家への道案内をしている山内が助手席で蘭と哀がその後ろである。

「ところであなた名前どうするの？工藤新一なんて名乗ったらすぐ探偵だとバレるわよ…まったく…探偵なのに有名になりすぎるのも問題よね…」

と哀が新一に言うと、

「そうだな…名前まで変える必要は無いだろうから…変えるのは名字だけでいいだろうけど、無難に母さんの旧姓の藤峰とか…」

と新一が考えながら答えた。

すると蘭が、

「でも新一が大女優藤峰有希子の息子だっというのには有名だからすぐバレちゃうんじゃない？」

と聞いた。

「なら、蘭の旧姓で毛利ならどうだ？」

と言った。

「まあ、毛利小五郎と工藤新一の2人の名探偵を混ぜたような名前だと思われかねないけど…それくらいなら偶然でごまかせるわね…」と哀が言うと、

「じゃあ、名字は毛利ね！なんか毛利新一って新一が婿養子に来たみたいだね！！」

と蘭が笑顔で言った。

すると山内が、

「へーっ、蘭ちゃんって旧姓毛利なんだ！毛利は木戸孝允や高杉晋作とかの出身の長州藩の藩主の名字だし、俺の山内は坂本竜馬や板

垣退助の出身の土佐藩の藩主の名字…どっちも幕末に明治維新のために活躍した志士のいる藩の藩主の名字だね！！すごい偶然だね！！

と嬉しそうに言った。

すると、

「蘭は長州藩の毛利とは無関係だ…」

と新一は不機嫌そうに言い蘭は、

「山内君、土佐藩なら私より新一の方が縁があると思うよ！！確か新一のお母さん女優だった頃竜馬のお姉さんの乙女役をやったもの！！」

と言った。

「そ、そう…」

と名字の無理やりな偶然で『運命的な物を感じる』とか言おうとしていた山内は少し残念そうに答えた。

そんな様子を見て哀が自分の真ん前の席の新一だけに聞こえるように、

「もしかして彼、蘭さんが結婚してる事知ってるにも関わらず蘭さんを狙ってるの？」

と聞くと新一は不機嫌丸出しの声で、

「ああ…」

と答えた。

そんな新一に哀はため息をついて、

「あなたも大変ね…」

と言った。

### 第13章 山内家の事情（前書き）

サブタイトルがいいのが思いつかず少しおかしいかもしれません。

### 第13章 山内家の事情

新一達が工藤邸を出発してから1時間が経ち、一応都内であるがかなりの山奥にさしかかっていた。

「おい、道間違えてないよな？こんな山奥に家があるのかよ……」

と新一が言うと山内は、

「この山を越えたらすぐだから」と答えた。

「でも山内君、こんな遠くから毎日帝丹大学に通ってるの？」

と蘭が聞くと山内は、

「いや、今向かってるのは実家で大学に入ってから近くのアパートで一人暮らしだよ」と答えた。

「じゃあなんで実家で怪しい動きしてるヤツがいるなんて知ってるんだ？」

と新一が聞くと、

「ああ、それは周平に聞いたんだ！」と答えた。

「周平？」

と蘭が聞くと、

「島津周平っていう家の使用人だよ！！！」と答えた。

「へーっ山内君の家使用人いるんだ」と蘭が言うと、

「家の親父の山内武頼は地元じゃ有名な大地主だから！！！」と山内は自慢げに答えた。

「でも、使用人が主人の息子にそんな事相談するなんて妙じゃない？」

と哀が言うと山内は、

「俺と周平は小さい頃からの親友で小中高つてずっと同級生だったんだ！でよく家の状況とか聞いてんだよ」  
と答えた。

「同級生を使用人として雇ってるの!？」  
と蘭が少し驚いたように言うと山内は、

「周平の亡くなった両親が家の執事と家政婦でね…その関係で家の使用人になったんだ…」  
と答えた。

山内のセリフに、

「その人のご両親亡くなってるんだ…」

と蘭が悲しそうに言うと山内は、

「ああ、2年前に交通事故で…一緒に車に乗ってた親父は無事だったんだけど…」

と答えた。

「話は変えるがなんでお前の親父さん警察や探偵嫌いなんだ？」  
と新一が聞くと山内は、

「20年前に宝石店の支店長だった親父の親友の萬田守蔵って人が宝石強盗に殺されてその犯人を警察が捕まえられなくて警察に失望して嫌いになっただけ…」

と答えた。

「それって探偵関係ないんじゃない？」

と蘭が言くと山内は困ったように、

「20年前で俺生まれてないし、詳しい事は知らないんだ…」  
と答えた。

「そりゃそつだ…」

と新一は言いながら車を進めていった。

## 第14章 到着（前書き）

オリジナルキャラがたくさん出て来てわかりずらいかもしれません  
が御了承ください…。

## 第14章 到着

30分後、ようやく新一達が山内家に到着した時、  
ビュオービュオー

と強い風が吹いていた。

「ふう、やっと着いたぜ……」

と新一が疲れたような表情で言っていると、

「…にしても風、強いわね…」

と哀が言った。

「うん…」

と蘭も長い髪をなびかせながら言っていたが、山内家の邸宅を見て、  
「わーっ！！大きな家…」  
と感心したように言った。

確かに工藤邸も結構大きな洋館だが、この山内家はさらに大きな  
和式の邸宅であった。

すると、

「あら、一輝さん…どうしたんですか？急に帰って来て…そちらの  
方は？」

と30代前半くらいの女性が山内に声をかけた。

「あつ、義母様…友人が家に来たいと言ったもので…」  
と山内が答えると新一が、

「山内君の友人の毛利新一です、こっちは妻の蘭でこっちが妹の哀  
です…今、両親が入院してて退院するまで妹の面倒を見てるんです  
が…長い時間留守番させるのは少しマズいと思い連れて来たんです  
が迷惑だったでしょうか？」

と嘘を交えた自己紹介をした。

「いえ、迷惑だなんて…ゆっくりしてくださいね…」

とその女性は笑顔で言っつてその場を離れて行った。

「今のは？」

と新一が聞くと、

「義母の秋穂だよ…母は10年前に病死して、5年前に親父と再婚したんだ…」

と山内は答えた。

山内に案内されて屋敷の中に入ると新一達と同じ年頃の男性と20代後半くらいの女性と30代前半くらいの男性の3人が話していた。

その中の新一達と同じ年頃の男が山内に気付き、

「よっ一輝久しぶり！そちらの方達は？」

と聞くと、30代前半くらいのの男性に、

「コラ！！周平！！いくら一輝様と親友だからと言ってお前はこの屋敷に仕えてる身だぞ！！言葉づかいに気をつける！！」と怒られてしまった。

その声に山内がなだめるように、

「まあまあ、守久さん言葉づかいくらいいいから…」

と言うと20代後半くらいの女性が、

「いえ、こういうことはちゃんとしておきませんか…ところでそちらの方達は？」

と言った。

山内は、

「ああ、僕の友人だよ…」

と言った後、新一達の方を向いて、

「紹介するよ！！まず、俺達と同年くらいの奴が家の使用人で俺の小学校以来の親友、島津周平でその横にいる女性が家の家政婦の笠倉留実さん、最後に30代の男の人がこの家の使用人頭をやっている百瀬守久さんだよ…家のことはこの3人で切り盛りしてるんだ」と紹介した。

新一達が3人に挨拶した後、山内が、

「ところで親父は？」

と3人に聞くと、百瀬が、

「旦那様なら別館の方にはいるのではないのでしょうか…」  
と答えた。

## 第15章 山内武頼

「へーっ、山内君のお父さんってほとんど1日中別館にいるんだ！」

と山内の父親、武頼に挨拶するために別館に向かっている最中、山内の話で蘭が驚いたように言うと、山内は、

「ああ、別館にはトイレや風呂場もあるから出掛けたり、メシ食ったりする時以外は1日中別館にこもってるよ…」

と大きな声で答えた。

ビューービューー

と強い風が吹いていて大声でないと会話がしづらいのだ。

「じゃあ、別館っていうよりその人の別宅になってるってことね…」と哀が呆れ顔で言うと山内は、

「別館には部屋が8部屋あって書斎や仕事部屋や寝室や居間とかに使ってるから不便は無いし、別館に勝手に入ると怒るから親父以外はめったに別館には入らないんだ…」

と言った。

「じゃあ、掃除とかはどうしてんだ？」

と新一が聞くと、

「親父が一通り自分でやってるみたいだよ…大きな声じゃ言えないけど親父裏でヤバい仕事してたって噂だからその証拠とか隠してんだろっな…」

と興味なさげに答えた。

「あら、実の父親に随分冷たいのね？」

と哀が言うと、

「あんな男もう父親だと思ってねーからな…母さんが死んだ時だつて母さんが危篤だと知りながら愛人だった今の義母の所に行っていなかったんだしな…」

と恨みのこもった表情で言った。

別館に着いて、

「なんか本館と比べて建物が新しいな…」  
と新一が呟いた。

本館は築数十年は経っていきそうだがこの別館は確かに和風建築ではあるがそれより随分新しい。

「ああ、20年前、先代の家主だったおじい様が死んでから別館を自分の別宅として使うために親父がリフォームしたらしいよ…」

と山内は答えながら別館のチャイムを鳴らした。

「誰だね？」

と不機嫌そうな男の声が聞こえると山内は、

「一輝です。友人を連れて来ましたので挨拶に…」

と答えると扉が開いて、山内武頼が出てきた。

武頼は新一達に笑顔を向けて、

「オー、一輝の友人達ですか！ゆっくりしてくださいね…！」  
と言った。

それを聞いた哀は新一と蘭だけに聞こえるように、

「あの人…上面だけは良さそうね…」

と呟き、新一と蘭を苦笑させた。

「立ち話もなんですからささ上がってください」

と武頼に別館内に上げられた新一達は、客間に案内されて、今回の妙な物音について詳しく聞こうとしたが、探偵とバレないように気を使いながら質問せざるを得なかったのであまり深く突っ込んだ質問ができず、結局めぼしい情報は得られなかった。

## 第16章 事件発生（前書き）

やっと本筋である事件に突入です。

## 第16章 事件発生

別館から出て40分ほど経ってから、客間で新一は自分の書いていた。

「何やってんだ？」

と10分ほどトイレに行って今帰ってきたところの山内が聞くと蘭が、

「この家の人たちのことをメモにまとめてるんだって」と答えた。

ちよつどその時新一が、

「できた！」

と言って蘭たちにそのメモを見せた。

そのメモには、

『山内武頼（56）

山内家家主

山内家周辺の大地主

山内秋穂（32）

武頼氏の後妻（一輝の母親である前妻は10年前に病死）

山内一輝（19）

武頼氏の息子

帝丹大1年

島津周平（19）

山内家の使用人

一輝の幼なじみで親友

2年前に両親が交通事故で他界

百瀬守久(34)

山内家の使用人

笠倉留実(28)

山内家の家政婦』

と書かれていた。

新一は3人のこのメモを見た後、

「こうしてまとめとくと後で役に立つかもしれないしな……」

と言った。

「ところでこの島津って人の両親、交通事故らしいけど、確かなの？」

と哀が聞くと山内は、

「警察は事故って断定してたぜ…遺体に不審な点は無かったし、車には細工した痕跡も無かったし、一緒に乗ってた親父も周平の親父さんがブレーキをかけ損ねた様子だったと証言してたしな…」

と答えた。

「えっ、オメーの親父さんその車に乗ってたのか!？」

と新一が驚いて聞くと山内は、  
「ああ、その車、親子の送迎用に使ってたからな…周平のお母さんは食材の買いだしで一緒について行ってたんだ…その日の親子の目的地といつも買いだしに行ってたスーパー近所だからな…」

と答えた。

その時、別館の方から、

パァン

という音が、

ビューオービューオー

と吹いている風の音に混じって聞こえた。

「い、今のって…」

「銃声？」

と蘭と哀が驚いたように言うと新一が、

「とにかく行ってみよう!!」  
と言って部屋を飛び出した。

新一に続いて蘭、哀、山内が部屋を出ると、部屋の外に秋穂がいて、

「何ですの今の音？」

と聞いてきた。

「わかりません……」

と新一が答えると蘭が、

「とにかく早く行ってみましょう!!」

と言ったため、4人は別館へ向かった。

4人が別館に着くと、書斎の窓ガラスが割れていて、そこを覗くと武頼が胸を撃たれて倒れていた。

新一は窓の割れた部分に手を入れ中から窓の鍵を開け中に入って武頼の脈をとった。

「警察と救急車を呼んで来ます……」

と秋穂が言くと新一は静かに、

「いや、救急車は必要ない……もう死んでいます……」

と答えた。

「そ、そんな……」

と秋穂が青い顔で言ったあと、

ビューオービューオー

という風の音以外は静寂に包まれていた。

## 第17章 警察到着（前書き）

あけましておめでとございます!!

本当は一昨日更新するつもりだったんですが大晦日と元旦は予想以上に忙しくて更新するのが遅れてしまいました…。

## 第17章 警察到着

2時間後、山内低に目暮警部たちが到着した。  
その時も、

ビューオービューオー

と相変わらず強い風は吹いていた。

「しかし、すごい風だな…」

と目暮警部が帽子を押さえながら言つと、

「本当にすごいですね…」

と高木刑事も答えた。

警部たちは玄関に行き、出迎えた秋穂に警察手帳を見せて、

「警視庁の目暮です…遺体はどこに？」

と聞くと秋穂は、

「別館の方です…」

と答えた。

「もちろん遺体には誰も触ってませんよね？」

と高木刑事が聞くと秋穂は困惑したように、

「い、いえ…さっきから毛利という方が現場に入ったままで…他の者はその方に言われてこの本館の居間で待機してますが…」  
と答えた。

「も、毛利だつて!？」

「また、あの死に神か…」

と高木刑事と目暮警部がその『毛利』という人物を小五郎だと思つて言った時、蘭と哀が出て来た。

「蘭君と哀君じゃないか!て、事はやっぱり…」

と目暮警部が蘭が出て来たことで『毛利』という人物が小五郎だと

思い込んで言う」と蘭は少し申し訳なさそうに、

「いえ、父じゃないです…」

と言った。

目暮警部たちが訳のわからないような様子でいると、蘭と哀と秋穂に案内されて現場へ向かった。

現場に警部たちが着くと新一が遺体の様子を見ていて、警部たちに気づくと、

「お待ちしていました目暮警部…」

と言った。

「工藤君じゃないか！？…でもさっき奥さんは毛利って…」

と目暮警部が困惑気味に言う」と新一は、

「すみません…この息子さんに依頼を受けてここに来たんですが、その依頼人に探偵だとばれないようにしてくれと頼まれたので蘭の旧姓の毛利を名乗ってたんです…」

と謝った。

「なんだ、そういうことか…」

と目暮警部が納得してると、高木刑事が、

「哀ちゃんがいるって事は他のみんなもいるのかい？」

と聞くと哀が、

「いないわよ…」

と答え、蘭が、

「その依頼人に子連れの方が探偵だと怪しまれないからと偶然家に来てた哀ちゃんに一緒に来てって頼んだんです…」

と追加説明をした。

「子連れって…君たちの娘にしては哀君は大き過ぎるんじゃないか？」

と目暮警部が聞くと高木刑事が、

「やだなあ警部、何も娘じゃなくて兄妹とか親戚の子とかでいいじゃないですか…」

と苦笑しながら言った。

そんな2人の様子を見て新一は、

（今は事件の捜査の方が先決じゃねーのかよ…）  
と苦笑していた。

## 第18章 捜査開始

「じゃあ、遺体の状況と発見時の状況を教えてくれるかね？」

と目暮警部に言われ、まず哀が、

「遺体を発見したのはここにいる私と工藤君と蘭さんそれに被害者の妻の秋穂さんと、今は本館でこの家の他の人たちと待機して  
る被害者の息子で工藤君に依頼した一輝さんの5人よ…」

と答え蘭が、

「遺体を見つけたのはこの別館から銃声が聞こえたからです…」

と答えた。

「ほう、じゃあその銃声が聞こえた時間はわかるかね？」

と目暮警部が聞くと、

「ええ、15時24分でした…ちなみに遺体発見同時、遺体の体温は  
はまだ温かく、死後硬直もまだ始まっていなかったので死亡時刻は  
僕たちが遺体を発見する30分以内ということですよ…」

と新一が答えた。

「検死の結果、死亡推定時刻は今から2時間から2時間30分前な  
ので、工藤君の証言と一致します…」

と高木刑事が目暮警部に伝えると目暮警部は、

「じゃあ、銃声が聞こえた時間が犯行時刻と見て良さそうだな…」  
と結論を出した。

「じゃあ、その時のこの家にいた人のアリバイを聞いておきたいか  
ら、他の方たちのいる本館に行くとしましようか…」

と目暮警部が言って、新一、蘭、哀、目暮警部、高木刑事、秋穂は  
本館に行った。

「では、犯行時刻の午後3時24分頃皆さんがどこでどうしてたか  
をお聞きしましょう…」

と本館に着いてすぐに目暮警部が言つとまず一輝が、

「俺は銃声が鳴るまで工藤探偵や蘭ちゃんたちとずっと一緒にいました…」

と答えた。

すると新一が、

「けど銃声がする少し前に10分くらいトイレ行つてただろ？」

と反論した。

すると蘭が、

「でも銃声が聞こえる2、3分前には戻ってきてたよ」

と言った。

次に秋穂が、

「銃声が聞こえた時はちょうど一人でした…でも銃声が聞こえて駆けつけようとしてすぐ、一輝さんや探偵さんたちと合流しました…」と答えた。

「ホー、では犯行時刻のアリバイは無いんですね？」

と目暮警部が聞くと新一が、

「いえ、秋穂さんと合流したのは銃声が聞こえてから1分もしてません…この本館から犯行現場の別館までどんなに急いでも5分ほどかかりますので、銃声が聞こえた時刻に別館にいなかったのは確かです…」

と言った。

次に百瀬が、

「我々使用人の3人は今夜の夕食の相談を15時15分くらいからしていました…」

と言い、笠倉と島津も同意するように頷いた。

「なら、外部犯の可能性が濃いな…」

「ええ、この家の方には一応アリバイはあるようだし…」

と目暮警部と高木刑事が悩んだように言った時、新一は、

(いや、まだ内部犯の可能性がある…)  
と考えていた。

その時、

「目暮警部!!」

と千葉刑事が中に入ってきた。

## 第19章 捜査(前書き)

やっと投稿できました。

投稿の間が開いてしまつてすみません。

次回以降はもつと頻繁に投稿できるかと思ひます。

## 第19章 捜査

事情聴取をしている応接間に入って来た千葉刑事に目暮警部が、

「オー、千葉君、どうしたんだね？」

と聞くと、千葉刑事は、

「この屋敷のセキュリティを任せられてるセキュリティ会社に問い合わせたんですが、この屋敷に不審な人物は侵入していないみたいです！」

と言った。

「それは本当かね!？」

と警部が驚いたように聞くと、

「ええ、こここのセキュリティは万全で、我々警察以外でこの屋敷にいるのは、被害者の奥さんの秋穂さんと被害者の息子の一輝さん、使用人の百瀬さん、島津さん、笠倉さんの他には一輝さんに依頼されて来たという工藤君、蘭さん、哀ちゃん以外はいないみたいです！」

と答えた。

すると島津が、

「工藤!？その探偵さんは毛利って名字じゃないんですか？」

と聞いた。

すると、

「ハア？」

と目暮警部が怪訝な表情で言い、高木刑事が、

「そういえば工藤君、探偵だとバレないように『毛利』って名乗ってたって言ってましたよね…」

と言うと新一はヤベツというような表情になって、

「すみません…探偵だということとは部屋で待機してもらった時に言ったんですが…本名を言うの忘れてました…僕、本名は工藤新一って言うんです…」

と言った。

すると、

「く、工藤新一って…」

「あの名探偵の!？」

と笠倉と島津は驚いたように言った。

話がそれていることに気づいた目暮警部が咳払いをしてから、

「しかし、犯人は何者なんだ?ここにいる人間には全員アリバイがあるのに外部から何者かが侵入した形跡も無いなんて…」  
と悩んだように言うと新一が、

「あの銃声が偽造だとしたら…犯行時刻は僕たちが遺体を発見する30分前から発見するまでということになりますよ…」  
と言った。

「なるほど…つまり、銃声が鳴った1分後まで1人でいたという秋穂さんと銃声が鳴る2、3分前まで10分ほどトイレに行っていたという一輝さんのアリバイは崩れるな…」

と目暮警部が納得したように言うと、高木刑事が、

「では、使用人の3人は15時前頃から夕食の相談を始める前まで何をしていたのか話してもらえますか?」  
と聞いた。

## 第20章 アリバイ

目暮警部にアリバイを聞かれて最初に口を開いたのは島津だった。

「僕は夕食の相談をする前は1人で物置の掃除をしていました…」と答えた。

「じゃあアリバイは無いんですね？」

と聞かれると百瀬が、

「その時間、我々使用人は1人で広間掃除をしていた私も含めてみんなそれぞれ別の部屋を掃除していたので完璧なアリバイがないのは周平だけじゃないですよ…」

と島津を庇うように言って、

「ええ、私も厨房の掃除を1人でしてました…」

と笠倉もそれに同意した。

「ということは、10分ほどトイレに行っていた被害者の息子の一輝さんにも外出していたという被害者の妻の秋穂さんにもそれぞれ別の場所を掃除していた使用人の百瀬さん、笠倉さん、島津さんの誰にも完璧なアリバイは無いということか…」

と目暮警部は言った。

高木刑事が、

「でも使用人の皆さんはどうして銃声が鳴った時に駆けつけなかったんですか？」

と聞くと、

「しょうがないじゃないですか！私たちが夕食の相談をしていた部屋は別館の書斎から離れてて銃声が聞こえなかったんですから！！」と百瀬が言い、

「確かに普段だったらきこえたかもしれませんが今日はこんな風が強くて、風の音に遮られてここから銃声は聞こえなさそうですね…」と新一が言つと、

「私がいた部屋からも風の音で少し聞きづらかったもんね…」

と蘭が言った。

新一と蘭の言葉で、

「確かに今日はすごい風ですもんね……」

と千葉刑事が外を見ながら言うと、

外では未だに、

ビューービューー

と音をたてながら強い風が吹いていた。

「つまりここからじゃ百瀬さんの言う通り銃声は聞き取れんというわけか……」

と目暮警部が言うと笠倉が、

「ええ、事件のことを知ったのは探偵さんが旦那様が殺されたと伝えに来たからですからね……私たちはその後ずっと3人でこの部屋で待機してましたよ……」

と言い島津が、

「笠倉さんの言う通りですよ……その探偵さんが『旦那様が別館で射殺された!!』』と言いに来た時に別館の書斎に向かおうとしたらその探偵さんに、『警察が来るまでこの部屋で待機するように』って言われたからずっとここで待機してましたよ……探偵さんはそれだけ言うと出て行ってしまいましたか……」

と言った。

「では、秋穂さんと一輝さんはその時どこに？」

と目暮警部が聞くと、秋穂が、

「探偵さんに『警察が来るまで自室で待機しているように』』と言われたので自室にいました……」

と答え、一輝も、

「僕も自室にいました……」

と答えた。

「なら、凶器はこの屋敷内にある可能性が高いですね……」

と高木刑事が言うと目暮警部が部下達に、

「よし、この屋敷内及びその近辺に凶器がないか搜索だ!!」

と命令した。

## 第21章 容疑者達の部屋1（前書き）

このところ時間があるし、調子もいいのでしばらくほぼ毎日投稿できるかと思えます。

## 第21章 容疑者達の部屋1

目暮警部が部下達に凶器の搜索を命じた後、

「さて、凶器を捜しているあいだ、皆さんの自室を調べたいのですがよろしいですか？」

と目暮警部が容疑者達に聞くと全員戸惑った様子であったが承諾した。

「ではまず百瀬さんの部屋からよろしいですか？」

と高木刑事が聞き最初に百瀬の部屋に行くことになった。

百瀬の自室には多くの新聞のスクラップがあった。

「ホー、これはたくさんありますな……」

と目暮警部が驚いたように言うと百瀬は、

「中学2年の頃から始めてますからね……」

と答えた。

「本当だ！！20年前の強盗事件のスクラップもある！！」

と高木刑事が古いファイルを見ながら言うと百瀬は、

「その事件の記事が最初にスクラップにしたやつなんで記念に残してるんですよ……」

と答えた。

すると目暮警部が高木刑事の見ていたファイルを見て、

「ああ、この事件なら昔お世話になった先輩によく聞かされたよ……確か、襲われたのはこの近くの街にある宝石店で総額で5千万円以上の宝石が盗まれさらに犯人を取り押さえようとした店長が射殺されたんだっただな……手掛かりも監視カメラの映像しかなく容疑者も拳がらないまま5年前に時効が成立したんでその先輩はとも悔しがっていたよ……確か殺された店長は萬田とか言ってたかな？」

とその強盗事件について言った。

「そのようですね…」

と高木刑事がその事件の記事を読みながら言うと蘭が、

「それってもしかして殺された武頼さんが探偵や警察嫌いになった原因になった事件じゃない？」

と言うと新一は、

「だと思っぜ…山内が言っただけ強盗事件で殺された武頼さんの親友も萬田って人だったし…」  
と答えた。

次に笠倉の部屋へ行くとたくさんさんの推理小説があった。

「まるで工藤君の家のミニチュア版ね…」

と哀が呆れた表情で言うと新一は、

「ウッセー！」

と毒づいた。

「亡くなった武頼さんって探偵や警察嫌いだったんですね？…推理小説をこんなにくさん持ってて何も言われなかったんですか？」  
と高木刑事が聞くと笠倉は、

「旦那様は自分は探偵や警察嫌いでしたが他の人の好みにはうるさく言わなかったですから…」

と答えた。

「そうですね…」

と目暮警部や高木刑事がマジメに捜査してる中、新一は嬉しそうに推理小説をパラパラと捲っていて、それを見ていた蘭が、

「まったく…相変わらずの推理オタクなんだから…」  
と呆れ顔で呟いていた。

次に行った島津の部屋には、車の構造についての本がたくさんあった。

「車関係の本がたくさんありますね」

と高木刑事が言つと島津は、

「ええ、車の技術者を目指してたので…そんな俺が車の事故で両親を亡くすなんて皮肉ですよね…」

と自嘲ぎみに言つた。

「車の事故で両親を？」

と事故のことを知らない目暮警部が聞くと島津は、

「ええ、両親もここで使用人をやつてたんですが…2年前に街に出る途中の山道で崖から落ちたんです…」

と悲しそつに答えた。

すると高木刑事が、

「それなら前、佐藤さんや千葉や由美さんと飲んだ時に由美さんに聞いたことがあります…乗っていたのはある名家の家主とその家の使用人をやつていた夫婦で運転していたのは使用人の旦那さんの方で対向車とすれ違う時にハンドル操作を誤つて崖から転落…対向車の運転主がすぐに助けを呼んで事故から30分ほどで救出されて後部座席に座っていた名家の主人公は命に別状はなかつたんですが運転席と助手席に座っていた使用人の夫婦はすでに手遅れだった…」と言つた。

「ええ、それで大学に行くのは諦めてここの使用人になつたんです…両親が死んでからもここに住まわせてもらつたり、高校卒業までの学費を払ってもらつたり、ここの使用人として雇つていただいたり…何から何までこの家にお世話になってますけどね…」

と島津が説明すると、

「今もその勉強をしてるんですね…」

と新一が言つた。

新一の目線の先には机の上にある車の技術者になるために勉強し

ていたとおもわれるノートがあつた。

すると島津は、

「ええ、大学へ行く余裕はないので独学で……」  
と答えた。

## 第22章 容疑者達の部屋2（前書き）

前回と今回ののは長かったなので2つに分けました。

## 第22章 容疑者達の部屋2

次に秋穂の部屋に行くときたくさんのお宝があり蘭は思わず、

「わーっ、きれい!!」

と声をあげていた。

「高そうな宝石ばかりね…」

と哀が呟くと、

「ええ、ここにあるのは結構価値のある宝石ばかりですよ…」

と秋穂が誇らしげに言った。

「これみんな殺された武頼さんからの贈り物ですか？」

と高木刑事が聞くと秋穂は、

「主人からの贈り物もありますがほとんどは自分で求めたものです

わ…」

と答えた。

次に山内の部屋に行くと、大量のモデルガンがあった。

「オメー、ガンマニアか？」

と新一が驚いたように聞くと山内は、

「悪いかよ？」

と不機嫌そうに答えた。

「まさかこの中に本物の拳銃が混じってるなんてことありませんよね？」

と目暮警部が疑わしそうな表情で聞くと山内は、

「当たり前ですよ!!ここにあるのは全部モデルガンなんですから

!!」

と反論した。

すると哀が、

「もし本物の拳銃があつたとしてもイコール彼が犯人とは限らないんじゃない？彼は今通つてる大学の近くのアパートに住んでいてこの部屋にはいないからそのすきにこっそり合い鍵を作つてこのモデルガンの中に本物を紛れ込ませることも可能なんじゃない？」  
と言つた。

哀の発言に一瞬圧倒された目暮警部だったが、  
「とにかく、このモデルガンの中に本物の拳銃が紛れ込んでいる可能性もあるので調べさせてもらいますよ…」  
と言つた。

しかし、調べた結果モデルガンの中には本物は混じつておらず目暮警部は、  
「凶器を発見できれば犯人を特定する手掛かりが手に入ったかもしれんのに…」  
と悔しそつに言つた。

「容疑者達の部屋をまわつてみたがこれといった収穫はなかったか…」  
「ええ、それに凶器も見つかつたという報告もまだ…」  
と目暮警部と高木刑事が困つたように言つているとき、哀が新一と蘭だけに聞こえるくらいの声で、  
「被害者の妻の秋穂さん…彼女なら動機がありそうね…宝石を買う金に困つて遺産目当てでの殺害…」  
と言つと新一が、

「動機の面では山内にも動機がある…山内のお袋さんが亡くなった時、武頼さんは危篤だと知りながら当時愛人だった秋穂さんのところにいたんだ…憎んでても不思議じゃない…でもだからといってあの2人だけを疑うわけにはいかない…使用人の3人だってオレたちがまだ掴んでない動機があるかもしれない…」  
と答えた。

「容疑者5人ともアリバイがなくて犯行可能…これじゃあ誰が犯人がまだわかんないね…」

と蘭が言うと新一は、

「ああ…」

と答えながらも、

(けど気になるな…あの人があの時言ったあのセリフ…)  
と考えていた。

## 第23章 手掛かり

「ウーム、仕方ないワシらも凶器の搜索にまわるとするか…」

「そうですね…この家の方達は全員身体検査をしましたですが凶器は出てきませんでしたし、硝煙反応も出ませんでしたのでこの屋敷のどこかに隠しているとしたか考えられませんか…」

と目暮警部と高木刑事が話していると、

「目暮警部!!」

と凶器の搜索をしていた千葉刑事が話しかけて来た。

「オー！千葉君、凶器が見つかったのか？」

と目暮警部が期待した表情で聞くと、

「いえ、本館と別館はあらかた調べたのですが凶器は見つかりませんでした…」

と答えた。

「そうか…となるとやはりこの家の庭に隠したというわけか…」

と目暮警部が言う和高木刑事が、

「この屋敷の庭はとても広いですし、林もありますから搜索には時間がかかるかと…」

と言った。

新一が千葉刑事に、

「もちろん縁の下も調べましたよね？」

と聞くと千葉刑事は、

「それが本館も別館も縁の下は格子があって入れなかったから調べて無いんだ…でも縁の下には無いと思うよ…格子と格子の間は拳銃が入らないほど狭かったから…」

と答えた。

「何で縁の下に格子なんてあるんですか？」

と蘭が山内家の人達に聞くと山内が、

「実は子供の頃、俺と周平が本館の縁の下に入って遊んでたら途中

で寝ちまって行方不明だつて大騒ぎになったことがあるんだ…それ以来縁の下に入り込めないように格子を作ったんだ…」と答えた。

「でも、子供が入り込まないために格子を作ったとしても拳銃が入らないほどの間隔なんて不自然じゃない？」

と哀が聞くと百瀬が、

「それはついでにネズミが入らないようにと前の奥様が…」と答えた。

「前の奥様つて亡くなった山内君のお母さんですか？」

と蘭が聞くと山内が、

「母さんネズミが嫌いだったから…」と言った。

その時、新一は何か思いついたような表情になり部屋を飛び出して行った。

「あっ、新一！」

と蘭が新一が部屋から飛び出して行ったのに気付き哀と一緒に新一を追って部屋を出て行ったが、目暮警部、高木刑事、千葉刑事の3人は捜査についての話をしている気付かなかった。

## 第24章 風

「工藤君何か思いつかんかね?…あれ?」

と新一たちが部屋を出て行ったことに気づいていなかった目暮警部が新一に意見を聞こうと話しかけたが新一はすでにこの部屋にいたため返事は無かった。

「いませんね工藤君…」

と千葉刑事が言っていると島津が、

「あの探偵さんなら連れの人と一緒に部屋を出て行きましたよ…」  
と言った。

それを聞いた高木刑事は、

「もしかして何か気付いたんじゃないでしょうか?」  
と期待した表情で言った。

10分後、新一は別館の縁の下の所で、

「うーん…」

と唸っていた。

「縁の下の格子がはずれる仕掛けになってるんじゃないかと思ったがそんな仕掛け無かったか…」

と新一が落胆したように呟くと、

「まったく…的外れの推理に私たちを巻き込まないでくれる?」  
と哀に言われてしまった。

新一は蘭と哀にも格子にはずれる仕掛けがないか捜すのを手伝ってもらっていたのだ。

「勝手に部屋飛び出して目暮警部たち心配してると思っし本館の方に戻る?」

と蘭が言っていると新一は、

「やっぱこの別館に何かあるように思えてならねーんだよね…」  
と呟いて別館に入って行った。

そんな様子を見て蘭と哀は呆れたように顔を見合わせて新一について行った。

犯行現場の書斎で新一が考え込んでいると、

「ねえ、新一！！この部屋は警察が来る前に新一が調べたけど不審な物は無かったんでしょ？それに鑑識さんも調べたけど何も無かったみたいだし…」

「ここについても時間の無駄よ…」

と蘭と哀が声をかけた。

その時、遺体発見時にこの部屋に入るために新一が開けて開けっ放しになっている窓から強い風が、  
ビュオーヒュオー  
と吹いてきた。

「ほら、風だつてこんなに強いし…こんな風にいつまでも当たつたら風邪引いちゃうよ！！」

と蘭が言うと、

「こんなに風が強いのに工藤君は推理に熱中してしてお構いなしのようなね…」

と哀が皮肉るように言った。

その後、蘭と哀が『推理バカ工藤新一』への愚痴を言い合い始めたが新一はそんなことお構いなく、

(風…そういえばこの部屋…)

と頭の中で呟くと何かを思いついた表情になり書斎から飛び出した。  
哀と新一の推理バカさについての愚痴を言い合っていた蘭がふと気付くと新一がいなくなっていて、

「あれ、新一？」

と呟くと哀がため息をつきながら、  
「推理に熱中して急に消えるのも彼の悪い癖ね……」  
と呟いた。

その頃新一は、書斎の隣にある武頼の仕事部屋にいた。

新一は黙っているため聞こえる音は、  
ビューオービューオー

という風の音だけだ。

そんな中新一は、

( やっぱりそうか…となると凶器の隠し場所はあそこだな…そして  
おそらく証拠もそこに… )

と不敵な笑みを浮かべていた。

その時、

「あーっ、新一こんな所にいた！ーもーっ！ー勝手に急にいなくな  
らないでよ！ー！」

と部屋に入ってきた蘭にお説教されそうになったが、

「あつ蘭ちようど良かった！ー高木刑事にこれ買って来てくれって  
頼んでくれ！」

と新一は蘭に高木刑事に買ってきてもらう物を書いたメモをわたした。  
た。

「こんなの何に使うの？」

と蘭が聞くと新一は再び不敵な笑みを浮かべて、

「もちろんこの事件を解き明かすのに使うんだよ……」  
と言った。

**第25章 推理ショーの始まり（前書き）**

そろそろクライマックスです！！

## 第25章 推理ショーの始まり

「何〜!? 犯人がわかった!? そう工藤君が言ってたのかね?」

蘭が新一に言われた通り本館に戻り目暮警部たちに新一が犯人がわかったと言っていたことを伝えると目暮警部が驚いたように言った。

「ええ…そう言っていました」

と蘭が答えると高木刑事が、

「じゃあこれから工藤君の推理ショーが始まるんだね?」

と期待を込めた表情で言った。

「いえ、推理ショーを始めるのはこれを買って来てもらってから言ってたので…」

と高木刑事に買う物を書いたメモをわたしながら言うと、

「じゃあ高木君、買って来てくれ!!」

と目暮警部が言い高木刑事はそれを買いに出かけた。

数十分後、高木刑事が新一に頼まれた物を犯行現場の別館に持って来て、

「はい、工藤君頼まれてたアクリル板とマッチと線香、それとガムテープ…こんな物何に使うんだい?」

と言うと新一は、

「それは容疑者たちをここへ連れて来てから…そしたらすべてを解き明かしてみせましょう…」

と不敵な笑みを浮かべながら言った。

その背後では、

ビューオービューオー

と風が吹き渡りよりいっそう不敵な雰囲気醸し出していた。

目暮警部たちが容疑者5人を連れてくると新一は、

「皆さんお集まりいただきありがとうございます…ではこれから僕の推理をお話します…僕たちが本館の客間にいるときに銃声が聞こえ、駆けつけるとこの家の主人山内武頼さんが拳銃で射殺されたこの事件…銃声が聞こえた時のアリバイはここにいる全員にありますが外部から侵入した形跡が無いため僕たちが聞いた銃声は偽造されたものと推理し、その場合この家の人は誰でも犯行可能…しかし、未だに凶器も銃声の偽造に使った仕掛けもまだ見つからない…事件の概要はこれで合ってますよね？」

と言った。  
「ああ、それで？犯人が解ったということは凶器を見つけたんだろ？」

と目暮警部が聞くと新一は、

「いえ、まだ見つけていません…」  
と答えた。

「み…見つけてない？」

と高木刑事が驚いたように言うと新一は落ち着いた様子で、

「凶器は見つけていませんがどこにあるかは予想がついてますよ…」  
と答えた。

「そ、それでどこにあるの？」  
と蘭が聞くと、

「ではご案内しましょう凶器のある場所へ…」  
と新一は不敵な笑みを浮かべながら言った。

## 第26章 縁の下

「凶器のありか…それはこの下です…」  
と新一が言つと、

「この下つて縁の下のこと？」

「…でも縁の下には拳銃が入らないほどの間隔で格子があるし、その格子が外れるような仕掛けも無かつたから縁の下に拳銃を隠すのは不可能じゃない？」

と蘭と哀が言つと、

「確かに縁の下の外側には格子が張り巡らされていて外から入れるのは不可能だ…」

と新一が答えると目暮警部が、

「じゃあダメじゃないか…」  
と言つた。

しかし新一は余裕の表情を崩さず、

「高木刑事！！割れた窓の穴を買って来てもらったアクリル板にガムテープ貼つて塞いで窓を閉めてください！！」

と高木刑事に頼んだ。

高木刑事が言われた通りにすると、

「これでこの室内に風は入らなくなりました…」  
と新一が言つた。

未だに外では、

ビューービューー

と風が吹いているが書斎には風が入らなくなった。

「風が何か関係あるのか？」

と山内が聞くと新一は、

「まあ、見てろつて…」

と言つて高木刑事に買って来てもらった線香にマッチで火をつけて書斎の真ん中へ行き、足元にかざした。

すると線香の煙がなびき始めた。

「どういうことですか？」

と秋保が驚いたように聞くと新一は、

「つまり、下から風が吹いているということですよ……」

と説明した後、

「高木刑事と千葉刑事！この部屋の畳をどけるの手伝ってください！」

と高木刑事と千葉刑事に頼んだ。

3人で畳をどけると部屋の真ん中に隠し扉があった。

「まさかここに？」

と目暮警部が言うと新一は、

「ええ、僕の推理通りならここに凶器があるはずですよ……」  
と答えた。

「でも何で隠し扉があるなんて解ったんだい？」

と高木刑事が聞くと新一は、

「この部屋で聞こえた風の音が他の所で聞こえた風の音と微妙に違ってたんですよ……風がどこかの隙間から漏れていて音が変わってるんじゃないかと思って漏れた風の音がする場所を探したら床からだったので隠し扉があるんじゃないかと思っただけですよ……」  
と答えた。

「音の違い解ったか？」

「全然……」

と高木刑事と千葉刑事が話していると、蘭が、

「新一、絶対音感持ってるんですよ……音痴なのに……」

と説明して哀が、

「まったく……宝の持ち腐れもいいところだよ……」

と呆れたように言った。

蘭と哀の言葉に新一は不機嫌そうに、

「ウツセー!!!」

と返した。

## 第27章 犯人(前書き)

前回の風の音の違いについて、隠し扉のある部屋では風の音は、「ビューオービューオー」にして、その他では「ビューオービューオー」としてました。

## 第27章 犯人

「とにかく、扉を開けてみましょう!!」

と高木刑事が言つと新一は、

「ええ…」

と答え隠し扉を開けた。

すると新一の推理通り縁の下に入れるようになっていた。

新一は腕時計型ライトをつけて縁の下に入つてた。

「工藤君！手伝おうか？」

と高木刑事が聞くと新一は、

「大丈夫です！目的の物は見つめましたから!!」

と言いながら縁の下から出て来た。

「で？何があつたのかね？」

と目暮警部が聞くと、

「凶器の拳銃にサイレンサー、トリックに使われた爆竹とタバコです…」

と答えながら拳銃とサイレンサー、爆竹とタバコの燃えカスを取り出した。

「爆竹とタバコ？」

と目暮警部が聞くと新一は、

「アリバイ作りのための銃声の偽装トリックに使われた物ですよ…タバコの途中に爆竹の導火線を巻き火を付けて時間差を作つて爆竹を爆発させてそれを銃声に見立てたんですよ…本当の犯行ではサイレンサーを使つて銃声を消してね…」

と説明した。

「な、なるほど…」

と千葉刑事が納得していると、新一はさらに、

「犯人はこの書斎にいる武頼さんを窓の外から射殺し、あらかじめ用意しておいた合鍵で別館に入り書斎の隠し扉からこの縁の下に

入り証拠を隠し爆竹の仕掛けをセットして部屋を元に戻して自分のアリバイを作ったのです…ちなみに山内が僕に捜査を依頼してきた武頼さんが夜中に聞いた不振な音というのは犯人が予行演習して別館に侵入して書斎の隠し扉の上にある畳を外すか元に戻している音だったと思います…」

と続けた。  
「それで、犯人は誰なの？…この家の人みんなに硝煙反応は出なかつたみたいだし…」

と蘭が聞くと新一は、

「それならこの縁の下で見つけたよ…」

と答えた。

「な、何を？」

と千葉刑事が聞くと新一は、

「それは…」

と言いながら縁の下に入って行き、数秒後に出て来て、

「百瀬守久さん…あなたが今着ているスーツとまったく同じデザインとサイズの背広をね!!」

と背広を取り出ししながら百瀬を獲物を狙うタカのような目で見据えながら言った。

## 第28章 証拠

新一に名指しされた百瀬は苦笑いしながら、

「ちよつと待つてくたさいよ……」

と言つてから、

「私が今着ているスーツと同じスーツが見つかったからと言ってイコール私が犯人とは限りませんよね？…誰かが私に罪を着せるために私のスーツをあらかじめくすねておいて、それを着て犯行におよんだのかもしれないよ？…私は仕事中心も同じようなスーツを着てますし…私はこの家の人間で一番大柄ですから誰でも私の服は着れますし……」

と言つた。

新一は、

「確かにそうですね…しかし……」

と言つてから一呼吸おいて、

「あなた言つてたじゃないですか？銃声がしたときどうして現場に駆けつけなかったのか高木刑事に聞かれた時、『自分たちがいた部屋は別館の書斎から離れ過ぎてて銃声が聞こえなかった』と……」

と言つた。

「そのどこがおかしいんだね？」

と目暮警部が聞くと新一は、

「あの時、百瀬さんたちには武頼さんが別館で殺されたとしか言つてなかったので犯行現場が別館の書斎だとは僕と蘭、哀、山内、秋保さんと警察の方々しか知らなく百瀬さんと笠倉さん、島津さんの3人は犯行現場を知らなかったはず…なのに百瀬さんは犯行現場が書斎だと言い当ててましたよね？」

と説明すると蘭が、

「確かに私たちが警部たちと百瀬さんたちがいる部屋に行くまで百瀬さんたちはずっと3人でその部屋に待機してたんだから犯行現場

が書斎だなんて知らないはずよね…」

と納得したように言い、哀も、

「それに別館には部屋が8部屋あるみたいだし…その中から犯行現場を言い当てるのは無理があるわね…」

と言った。

「どういふことが説明してもらいましょつか百瀬さん？」

と目暮警部が詰め寄ると百瀬は、

「そんなのたまたまで…それにそんなことじゃあ決定的な証拠にはなりませんよ!!」

と言った。

すると新一はフツと笑って、

「あなたが凶器と一緒に自分自身が疑われてしまうような自分のスーツをここに隠したということはよっぽどこの隠し扉が見つからないという自信があったのでしょうか…それに隠し扉を開くためにこの部屋の畳を全部どける作業は手袋をしてたら時間がかかってしまいます…だからついてるはずですよこの凶器の拳銃に…百瀬さん! あなたの指紋がね!!」

と新一が鋭い目つきでいうと百瀬は観念したようにガックリとうなだれた。

## 第29章 動機

「でも百瀬さんがどうして…」

と島津がまだ信じられないという表情で聞くと百瀬は、

「旦那様は私の父を殺したんです…」

と静かに行った。

「ど、どうということだね？」

と目暮警部が聞くと新一が、

「これは僕の想像ですが…百瀬さん、あなたの父親は20年前に宝石強盗に殺害された萬田守蔵さんじゃないんですか？」

と百瀬に聞いた。

その質問に百瀬が、

「ええ…」

と答え、

「どうということだね工藤君!？」

と目暮警部が新一に聞くと新一は静かに、

「つまり、20年前の宝石強盗は今日殺害された山内武頼さんだということですよ…」

と答えた。

「でも親父は宝石強盗なんかしなくても金なんかいくらでも…」

と山内が反論すると新一は目暮警部に、

「目暮警部…殺人事件が起こって犯人を突き止める時どうしますか？」

と聞いた。

目暮警部が突然の質問に戸惑いながら、

「そ、そりゃあ…被害者の周辺で被害者を殺害する動機のある人物を調べて…」

と答えていると再び新一が、

「じゃあ強盗事件で犯行が現場にいた人を殺害した場合は？」

と聞いた。

その質問に、

「それならまず、目撃者の証言を聞いて強盗事件の前科のある人物を……」

と目暮警部が答えていると途中で蘭が、

「もしかして……武頼さんはもともと萬田さんを殺害するつもりだったけど普通に殺したんなら自分が疑われるから強盗殺人に見せかけて萬田さんを殺したんじゃない……」  
と言った。

蘭の仮説に新一が、

「ああ……まあその動機が何なのかはわからないけどな……」  
と答えると高木刑事が、

「でも何で20年前の強盗殺人犯が殺害された山内武頼さんだつてわかるんだい？」  
と聞いた。

新一が、

「そう考えるとなぜこんな隠し扉から縁の下に行けたかということに説明がつくんです……」。

まず、その強盗殺人事件が起こったのが20年前……そして武頼さんの父親であるこの家の前家主が亡くなりこの別館を改築したのも20年前です……」

と言つと哀が、

「なるほどね……前の家主が亡くなり自分がこの家の家主になった武頼さんは別館を改築し隠し扉から縁の下へ行けるようにし、そこになるべく自分以外の人間を入れないようにした……つまり誰にも見られたくない物を縁の下に隠したということね……それは恐らく強盗事件で奪った宝石つてところかしら？……さっき工藤君がこの縁の下の中を探した時にその宝石を見つけてない……ことは恐らく埋めているのね……」  
と言った。

「ああ…それに強盗事件の証拠を縁の下に隠してたから山内が子供の頃縁の下に潜り込んだときに格子をつけたんでしよう…再び入り込んだときにその宝石を見つけてしまわないように…だからこの縁の下を掘れば出てくるはずですよ…その宝石が…」

と新一が言つと、

「でも百瀬さんはどうして隠し扉のことを知っていたんですか？」と笠倉が聞いた。

新一が、

「百瀬さんの部屋には新聞のスクラップのファイルがたくさんありました…その中で1番古いファイルは20年前の萬田さんが殺害された事件のファイルだったことからその事件について調べるために事件の記事を集めていたんでしよう…百瀬さんのファイルには事件の記事ばかりでしたから…」

と答えると、

「ええ…ずっと調べてましたよ…」

と百瀬が静かに言いさらに、

「やっと旦那様が犯人でこの別館に隠し扉があるという仮説にたどり着いたのは半年前…それから私は旦那様が毎日寝る前に飲まれるお茶に睡眠薬を入れて物音がしても起きてこないようににして別館の畳の裏を調べて書斎で隠し扉を見つけたのです…それから毎日、旦那様のお茶に睡眠薬を入れ縁の下の床を掘り起こして先週やっと宝石を見つけたのです…」

と静かに言っていたが、その後急に口調が激しくなり、

「それで私は父の復讐をすることを心に誓ったんだ！！…まさかか予行演習をしているときに旦那様が目を覚ましその音を聞かれるとは思っていませんでしたから…半年間毎日睡眠薬を飲ませてたので薬が効きにくくなってたんでしょね！！」

と言ったとたん素早く懐からナイフを取り出し、哀を人質にとり、

「この子を殺されたくなければ逃げる道を空けるんだな！！」

と新一や目暮警部たちに向かって言った。

### 第30章 事件解決（前書き）

次回で完結です。

### 第30章 事件解決

哀が百瀬に逃走するための人質として捕まってしまう目暮警部が、「バカなまねはやめない！早くその子を放すんだ！！」

と言ったが百瀬は、

「うるさい！！」

と言って聞く耳を持たなかった。

新一と蘭が哀を救い出す隙をうかがっていたがなかなかその隙ができずに動けないでいると、いつの間にか山内が百瀬の後ろに回り込んでいで百瀬を蹴った。

その蹴りは空手をやっている蘭のような強力な蹴りではないが、不意を付かれた百瀬は蹴られた勢いで抱きかかえていた哀を落とし、た。

哀が百瀬の手から離れた瞬間、蘭が手刀で百瀬の持つてるナイフを払い落とし、新一は証拠として持つていた拳銃を百瀬に向かって蹴った。

新一が蹴った拳銃は百瀬の顔面に直撃して百瀬を昏睡させた。

すぐに高木刑事が百瀬に手錠をかけて百瀬は逮捕された。

その後、百瀬は警察に連行され、警察が屋敷の別館の縁の下を掘り起こした結果、新一の推理通り20年前の宝石強盗で盗まれた宝石が発見された。

事件解決後、新一が山内に、

「今回は助けられちゃったな……」

と言つと山内は、

「百瀬さん、何か集中すると周りが見えなくなる性格なんだ…だから目の前にいる警察や工藤たちに集中していて目の前にいなかった俺が後ろに回り込んでも気づかないと思ったんだ…うまくいったら？」

と答えた。

新一がため息をつきながら、

「オメーに借りができちまったな…」

と言うと山内は急に元気になって、

「じゃあ蘭ちゃんとデートさせてくれよ！…」

と言った。

「ハア！？」

と新一が驚いたような表情で言う「と山内は笑いながら、

「だから、蘭ちゃんとデートさせてくれたら借しはチャラにしてやるってことだよ！」

と言った。

新一は、

(このヤロオ…まだ蘭のこと狙ってたのか！！)

と思いつながら、

「バーロ！…んなことゼツター許さねーからな！…」

と言うと山内は、

「工藤：お前は俺に借りがあるんだろ？俺は蘭ちゃんとデートさせてくれるだけでチャラにしてやるって言うてるんだぜ！簡単なことじゃねーか？」

と言ってきた。

「とにかく！ゼツターダメだ！！」

と言っていた新一だったが何かを思いついたような顔を見ると山内に、

「オメー蘭とデートがしたいんだよな？」

と聞いた。

山内が、

「ああ……」

と答えると新一は、

「しゃーねーな……蘭に話してみるよ……」  
と言った。

「ほ、本当か？」

と山内が嬉しそうに言うと、

「ただし……蘭が指定した集合時間と場所を必ず守れよ！その日のその時間のその場所以外だったらこの話は無しだ……いいな？」

と新一が釘を刺すように言うと山内は何の疑いも持たずに頷いて舞い上がっていた。

第31章 デート！？（前書き）

これで完結ですー！！

### 第31章 デート！？

週明けの月曜日、蘭は山内に会おうと山内に近づいて、

「山内君！！新一に話は聞いたよ！土曜日の朝9時、米花駅に集合ね！！」

と話かてきた。

「ああ…わかった」

と山内が答え、

「あのさ…」

と山内が蘭に話しかけようとしたが、

「蘭！！早くしないと講義に遅れるよ！！」

と蘭は園子に呼ばれて行ってしまった。

その後、蘭と山内は話すことなく土曜日になり、山内は嬉々として米花駅に向かった。

米花駅に着いた山内が蘭を見つけて、

「蘭ちゃん！！」

と言つと蘭も山内に気づいて、

「あつ！山内君！！」

と言った。

山内が蘭の方に行こうとすると、

「なんや山内、遅いやないか…5分も遅刻してるで…」

「梅田のビッグマンでアタシを4時間も待ちぼうけ食らわすような男にそんなセリフ誰も言われたないと思うで…」

「なんや和葉…そんな高2の時のことまだ根に持つてるんか？」

「当たり前や！！」

という男女の大阪弁の漫才のような会話が聞こえてきた。

山内が声がする方向を振り返ると和葉と平次がいた。

山内が辺りを見渡すと青子と快斗もいとそそばに園子が山内にとっては見知らぬ色黒の男と楽しそうに談笑していた。

（蘭ちゃんとのデートの待ち合わせ場所になんてこんなに知り合っているんだ？）

と山内が戸惑っていると言っていると蘭のもとに、

「ほら、ジュース買ってきたぞ！」

といいながら新一が現れ、蘭に缶ジュースをわたしていた。

「どういうことだよ工藤？」

と山内が新一を自分の所に引っ張ってきて聞くと新一は、

「オメー、『蘭とデートさせてくれ』って言ったんだよな？」

と逆に聞いた。

「ああ、なのになんでお前らまでいるんだよ？」

と山内がイラついたように新一に聞くと、新一は表情を変えずに、

「一般的にデートって言葉は男女が日時を決めて会うことだけど、別に男女2人きりじゃなくても日時を決めて待ち合わせをすること、デートって言うても間違いじゃない…蘭と待ち合わせをしてここに来たんだろ？…だからこれも立派なデートだ！！」

ちようど今日、俺と蘭、服部と和葉ちゃん、黒羽と青子ちゃん、園子と京極さんで仙台へ旅行へ行く予定だったから、お前も連れて行ってやるんだよ！感謝しろよ！！」

と言った。

「だからって…」

と山内が言っていると、

「嫌なら帰ってもいいんだぜ？…だいたい蘭と2人きりでどっか出かけるなんて服部や黒羽でも…イヤ、俺以外の他の男とだなんてゼツター許せねーのにお前となんか許せるわけねーだろ！！」

と新一は独占欲丸出しで恐ろしいオーラを放ちながら言い、山内はその人も殺しかねないオーラに青ざめていた。

その後、旅先で9人で行動していたが自然と各カップルごとに分かれて山内は9人という大人数での旅行にもかかわらず独り旅以上の孤独を味わう羽目になった。

この一件以降、山内は新一を恐ろしく感じたのか蘭に言い寄ることとはなくなった。

) e n d (

### 第31章 デート!? (後書き)

やっと完結しました!

事件のこと書いてたら予想外に長くなってしまっ…(そのわりに事件の内容は大したこと無い…)。

まあ、今回のでわかったことは自分には推理物を書くのは向いてないってことですかね…ハア…。

あと、小説のネタが切れてしまいました…。

なのでリクエストを募集しようかと思えます。

コナンのファンフィクションで、新蘭、平和、快青などの原作通りのカップリングでお願いします。

恋愛物でなくてもいいし、新蘭前提ならコナンと哀がメインでもいいです。

こんなコナンの小説が書いて欲しいというリクエストがあったら、この小説または別の小説の感謝または作者へのメッセージに書いてください。

もう少ししたら少々忙しくなると思うのでなかなか更新できないと思いますがお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8717n/>

---

大学生探偵、工藤新一

2011年2月24日14時30分発行